

村芝居

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

わたしが支那の芝居を見たのは過去二十年間にたった二度だけであった。前の十年は絶対に見なかつた。また見ようという意思も機会もなかつたから、その二度はどちらも後の十年のうちで、しかもとうとう何の意味をも見出さずに出て来たのだ。

第一回は民国元年、わたしが初めて北京へ行った時、ある友達から「この芝居は一番いいから、以て世相を見てはどうかナ」と言われて、「芝居見物も面白からう、まして北京だもの」と大に興じてすぐに何やら園とかいう処へ行ったら、もう世話物が始まつていて、小屋の外には太鼓の響が洩れていた。わたしどもは木戸口を入ると、赤いものだの、青いものだの、幾つも眼の前にキラめいて、舞台の下にたくさんの頭を見たが、よく気をつけて見なおすと、まん中にまだ幾つかの空席があつたから、そこへ行つて坐ろうとした時、わたしに向つて、何か言つた者があつた。最初はガンガンという銅鑼の音で、よく聞えなかつたが、注意して聞くと、「人が来るから、そこへ坐つてはいけない」というのだ。わたしどもはぜひなく後ろへ引返して来ると、辮子のぴかぴか光つた男が、わたしどもを側へ来て一つの場所を指さした。その場所は細長い腰掛で幅はわたしの上腿の三分の三くらい狭く、高さは下腿の三分の二よりも高い。まるで拷問の道具に好く似ているの

で、わたしは思わずぞつとして退いた。

二三歩あるくと、友達が、「君、どうしたんだえ」とわたしのあとから跟いて来た。

「なぜ行くのだ。返辞をしたまえな」

「いやどうも失敬、なんだかドンドンガンガンして、君のいうことはサツパリ聞えないよ」
あとで考えてみると、全く変なことで、この芝居はあまり好くなかったかもしれない。
でなければわたしは舞台の下にじつとしていられない質なんだろう。

第二回はいつのことだか忘れたが、とにかく湖北水災義捐金を募集して譚叫天がまだ生きている時分だ。その募集の方法は、二元の切符を買って第一舞台で芝居見物をするので、そこに出る役者は皆名人で、小叫天もその中にいた。

わたしが切符を一枚買ったのは本来、人の勧めに依った責め塞げであったが、それでも誰か、叫天の芝居は見ておくものだ、といったことがあったらしく、前年のドンドンガンガンの災難も忘れてつい第一舞台へ行つて見る気になった。まあ半分は、高い価を出した大事の切符を使えば気が済むのもあった。

わたしは叫天の出る幕が遅いと聞いていたので、第一舞台は新式の劇場だから座席を争うようなことはあるまいと、わぎと九時まで時を過してやっところさとして出て行った。ところ

が、その日も相変らず人が一杯で、立っているのも六ツかしいくらい。わたしは仕方なしに後方の人込みに揉まれて舞台を見ると、ふけおやまが歌を唱っていた。その女形は口の辺に火のついた紙捻を二本刺し、側に一人の邏卒が立っていた。わたしは散々考えた末、これは目蓮の母親らしいな、と想った。あとで一人の和尚が出たから気がついたので、さはいいながら、この役者が誰であるかを知らなかった。そこでわたしの左側に押されて小さくなっていた肥えた紳士に訊いてみると、彼はさげすむような目付でわたしを一目見て、「龔雲甫」と答えた。わたしはひどく極りが悪くなつて顔がほてつて来た。

同時に頭の中で、もう決して人に訊くもんじやないと思つた。そこで子役を見ても、女形を見ても立役を見ても、どういう質の役者が何を唱っているのか知らずに、大勢が入り乱れたり、二三人が打合つたり、そんなことを見ている間に九時から十時になった。十時から十一時半になった。十一時半から十二時になった。——そうして叫天はどうとう出て来なかつた。

わたしは今まで何事に限らずこんなに我慢して待つたことはなかつた。いわんやわたしの側にいた紳士はハーハー息をはずませて肥えた身体を持ってあましていた、舞台の上のどんちゃん、どんちゃんの囃や、紅や緑のまぶしいキラめき。その時十二時だ。たちまちわ

たしはとてもこんな処にいられないと思つた。同時にわたしは機械的に身を捻つて力任せに外の方へと押出した。後ろは一杯の人で通る路もなかつたが、大概その弾力性に富んだ肥えた紳士が、早くもわたしの抜け出したあとに、彼の右半身を突込んだので、わたしは自然に押され押されて木戸口に出てしまった。

街は観客の車以外にはほとんど一人も通行人がなかつた。それでも木戸口には十何人か頭を昂げて芝居の番附を見ていた。外に一かたまりの人が、何にも見ずに立っていた。わたしは何にも知らずに来たことを我れながら悔んだが、結局芝居の題目さえも忘れてしまった。

わたしが实际いい芝居を見たのは、それよりずっと前の事だ。

その時おそらくまだ十一二にもならなかつたろう。わたしも魯鎮の習慣は、およそ誰でも嫁に入つたむすめは、まだ当主にならないうちは、夏の間たいていは里方に行つて暮すのである。その時分わたしの祖母はまだ達者であつたが、母もいくらか家事の手伝いをしていたので、夏も長く帰っていることは出来なかつた。ぜひなく墓掃除をすましたあとで、二三日の暇を見て抜け出して行くのであつた。わたしは母親に跟いて外祖母の家に遊びに行つたことがある。そこは平橋村と言つて、ある海岸から余り遠くもないごくこ

く偏僻へんびな河添いの小村で、戸数がやつと三十くらいで、みな田を植えたり、魚を取ったり
 そういう暮しをしている間に、ただ雑貨屋が一軒あるだけであつたが、わたしに取つては
 極楽世界であつた。ここへ来れば優待されるのみか「秩チー秩スー斯ハン干ユウ幽ウチ幽ナン南山シヤン」など
 というものを唸らなくともいいからである。

わたしと一緒に遊ぶいろいろの小さな友達が遠客が来たので、彼等もまた父母の許しを
 得て、仕事を控えてわたしのお相手をした。小村の中の一家の客もほとんど大概芝居のハ
 ネたあとの女を見に行くことを考えていた。しかし叫天はそこにもやッぱりいなかつた：

：

さはさりながら夜の空気は非常に爽さわかで、全く「人の心脾しんひに沁しんむ」という言葉通りで、
 わたしが北京ペキンに来てからこの様ないい空気に遇つたのは、この芝居帰りの外ほかにはなかつた
 ようにも覺えた。

この一夜ひしよはとりもなおさず、わたしが支那芝居に告別をした一夜で、もう一度そんなこ
 とに遇おうとも思わず、たまたま芝居小屋の前を過ぎても、わたしどもとはまるきり関係
 がなく、精神がすでに一つは天の南にあり、一つは地の北にあつた。

けれどもその二三日前にわたしは思いがけなくある日本の本を読んだ。惜しいことには

本の名前も著者の名前も忘れてしまったが、とにかく支那芝居に關すること、その中の一篇をかいつまんでいうと、支那芝居は無闇に叩き、無闇に叫び、無闇に踊り、觀客の頭を昏こんらん乱させるから、劇場向きではないが、野のびろ広いところで遠くの方から見ていると、自然に面白味がわかつて来ると書いてあつた。わたしはその時そう思った。これはいつもわたしの胸の中にあつてまだ言い出したことのない言葉だと。だからわたしはいい芝居は野外で見られるものと、しつかり覚えていた。北京ペキンへ行つてからも芝居小屋に二度入つたが、やツぱりあの時の影響を受けたのかもしれない。何しろこれは公共のものではないか。

わたしどもは年頃もおつかつたが順序から言えば一番下の弟だ。外ほかに幾人も目上の者がある。村じゆうは皆同姓で一家であつた。そうはいうものものわたしどもは友達だ。喧嘩でもして年上の者を打つと一村の者は老人も若い者も、目上という言葉を想い出せない。彼等は百人中、九十九人は字を知らなかつた。

わたしどもの日々の仕事は大概蚯蚓みみずを掘つて、それを針金につけ、河添いに掛けて蝦えびを釣るのだ。蝦は水の世界の馬鹿者で遠慮会釈もなしに二つの鉞はりで釣さの尖さきを捧げて口の中に入れる。だから半日もたたぬうちに大きな井に一杯ほど取れる。その蝦はいつもわたしが食べることになるのだ。その次は皆と一緒に牛を飼うのだがこれは高等動物のせいかもしれ

れない。黄^{おうぎゆう}牛^{ぎゆう}も水牛も空をつかつてわたしを馬鹿にする。わたしは側へゆくことが出来ないで遠くの方で立っていると小さな友達はわたしが「秩^{チー}秩^{チー}斯^ス干^{ハン}」が読めることな
ど頓^{とんじやく}著^{やく}なしに寄つてたかつて囉^{はや}し立てる。

わたしがそこにいて一番楽しみにしたのは、趙^{ちよう}莊^{そう}へ行つて芝居を見ることだ。趙莊
は比較的大きな村で平橋村から五里離れていた。

平橋村は村が小さいので、自分で芝居を打つことが出来ないから、毎^{まい}年^{ねん}趙莊に行くら
かお金を出して一緒に芝居を打つのである。その時分わたしは、彼等が何のために毎^{まい}年^{ねん}
芝居を催すか、ということについて一向無頓著^{むとんじやく}であつたが、今考えてみると、あれはた
ぶん春^{はる}祭^{まつり}で里神樂^{さとかぐら}（社^{ツエシ}戲^シ）であつたのだ。

とにかくわたしの十一二歳のこの一年のその日はみるみるうちに到着した。ところがそ
の年は本当に残念だつた。早く船を頼んでおけばよかつたのに、平橋村にはたった一つ大
きな船があるだけで、それは朝出て晩に帰る交通機関で、決してよそ事には使えなかつた。
そのほか小船はあるにはあるが、使い途^{みち}にならない。隣の村に人をやって訊いてみたが、
もうみんな約束済であいてる船は一つもない。外祖母は大層腹を立て、なぜ早く注文して
おかないのだ、と家^{うち}の者を叱り飛ばした。母親は外祖母を撫^{なだ}めて、「わたしども魯鎮は、

小さな村の割合に芝居を多く見ているのですよ。一遍ぐらいどうだつていいじゃありませんか」と押止めた、だが、わたしは泣きだしそうになった。母親は勢限りわたしをたしなめて、「決していやな顔をしちやいけませんよ。おばあさんが怒ると大変です」と言つて、それから誰とも一緒に行くことを許さなかつた。「おばあさんに心配させるものはありません」とまたあとで言つた。

それはそれでとにかくおさまつたが、午後になるとわたしの友達は皆行つてしまつた。芝居はもう開いてゐるのだ。わたしは遠音に囃を聞いて、「今頃は友達が舞台の下で、豆乳を買つて食べてるな」と想つた。

その日は一日、釣りにも行かず物もあまり食べないで母親を困らせた。晩飯の時分には外祖母もとうとう気がついて、この子がすねるのも無理はないよ。あの人達はあんまり無作法だ。お客に対する道を知らないといつて嘆息した。

飯を食つてしまうと、芝居を見に行つた子供達は皆帰つて来た、そうして面白そうにきよの芝居の話をした。ただわたしだけは口もきかずに沈んでゐると、彼等は皆嘆息して気の毒がった。

雙喜という子供は中でも賢い方であつたが、たちまち何か想い出して、「大船ならあれ

があるぜ。八叔はちおじの通い船ぶねは、帰って来ているじゃないか」

十幾人のほかの子供はこの言葉に引かされて勇み立ち、あの船で一緒に行こう、と皆立上った。わたしはようやく元気づいた。けれど外祖母は子供だけじゃ安心が出来ないと言った。母親も、「誰たれか一人大人を附けてやりましょう」と言ったが、大人は昼の仕事に勞つかれているので、夜頼むわけにはゆかない。どうしようかと考えている中に、雙喜はまた何かいい事を想いついたようで大声上げて言った。

「わたしが引受けます。船は大きいし、迅じんちゃんはおとなしいし、わたしどもは泳ぎがうまいし、こんなら大丈夫です」

まったくそうだ。この十幾人の子供は実際一人だって、鴨の仲間でない者はない。その上二三人は大潮を乗切った者さえある。

外祖母も母親もようやくやく安心して今はもう何とも言わずにただ笑っていた。わたしどもは一斉に立上つておめき叫んで門を出た。

わたしの重苦しい心は、急に軽く晴れやかになった。身体ものびのびして大きくなったように思われた。門を出ると月下の平へい橋きょうには白い苦とまぶね船ふねが繫もつていた。みんなは船に跳び込んだ。雙喜は前の棹を引抜き、阿發あはつは後ろの棹を抜いた。年弱としよわの子供は皆わたし

に附いて中の間に坐つた。年上の子供は船尾に聚つて来た。母親は送つて来て「気をつけ
ておいでよ」と言つた時には、もう船は出ていた。橋石にぶつかつて二三尺退いたが、す
ぐまた前に進んで橋を通り抜けた。そこで二艇の櫓をつけて、一艇に二人がかかつて一里
行く^ゆと交替した。笑う者もあつた、喋舌^{しゃべ}る者もあつた。その声は水を切つて行く音と入り
交つた。左右はみな青々とした豆麦の畑をとおす河中に、われわれは飛ぶが如く趙莊さし
て進んだ。

兩岸の豆麦と河底の水草から発散する薰^{かおり}は、水気の中に入りまじつて面を撲つて吹きつ
けた。月の色はもうろうとしてこの水気の中に漂つていた。薄黒いデコボコの連山は、さ
ながら勇躍せる鉄の獣^{けだもの}の背にも似て、あとへあとと行く^ゆようにも見えた。それでもわた
しは船脚^{ふなあし}がのろくさくさえ思われた。彼等は四度手を換えた時、ようやく趙莊がぼんや
り見え出して、歌声もどうやら聞えて来た。幾つかの火は舞台の明りか、それともまた漁
りの火か。

あの声はたぶん横笛だろう。宛^{えん}転^{てん}悠^{ゆう}揚^{よう}としてわたしの心を押し沈め、我れを忘れて
いると、それは豆麦や藻草の薰^{かおり}の夜気^{やき}の中に、散りひろがってゆくようにも覺えた。

その火は近づいた。果して漁り火だった。わたしが今し方見たのは趙莊ではなかつた。

それは一叢ひとむれの松林で、わたしは去年遊びに来て知っていたが、今も壊れた石馬せきばが河端かわばたにのめつて、一つの石羊せきようが草の中にうづくまつていた。この林を越すと、船はぐるりと廻つてまた港に入り、そこで初めて趙莊が見えた。

何よりも先きに眼に入つたのは村の端れの河添いの空地に突立っている一つの舞台だ。ぼんやりとした遠くの方の月夜の中で、空間の諸物がほとんどハッキリ分界していなかった。わたしは画の中の仙境がここへ出現したのかと思つた。この時船はいつそう早く走つて、まもなく舞台の人が見え、赤い物や青い物が動いて舞台の側の河の中に真黒に見えるのは、見物人の船の苦だ。

「前の方に空間がないから俺達は遠くの方で見よう」と阿發が言つた。

船はここまで来ると、ゆっくり漕ぎ出して、だんだん側に近づいてみると果たして空間がなかった。みんなが棹をおろしたところは、舞台の正面からはずいぶん離れていた。正直に言うと、わたしどもの白苦しろとまの船は黒苦くろとまの船の側へ行くのはいやなんだ。まして空間がないのだから。

停船の間際に舞台の上を見ると黒い長※の男が、四つの旗はたを背に挿して、長槍をしごぎ、腕を剥き出した大勢の男と戦いの最中であつた。

「あれは名高い荒事師だ。蜻蛉返りの四十八手が皆出来るんだよ。昼間幾度も出た」と
雙喜は言った。

わたしどもは皆船頭に立つて戦争を見ていたが、その荒事師は決して蜻蛉返りをしなかつた。ただ腕を剥き出した男が四五人、逆蜻蛉を打つと皆引込んでしまった。続いて一人の女形おやまが出てイーイーアーと唱った。雙喜はまた言った。

「夜は見物が少いから、荒事師は怠けているのだ。誰だつてしんその腕前を無駄に見せるのはいやだからね」

全くそうだった。その時舞台の下にはあまり多くの人を見なかった。田舎者はあすの仕事があるから、夜になると我慢が出来ず皆睡りに行った。ちらばら立っているのはこの村と隣の村の閑人であった。黒い苦船の中に立っているのはいうまでもなく村の物持の家族であった。けれど彼等は芝居を見ているのではなかった。大抵はそこでお菓子や果物や瓜などを食べていた。だから平たく言えば見物が無いと言つてもいいくらいで、雙喜が無駄だといったのも無理はない。

わたしは格別、逆蜻蛉を見たいとも思わなかった。わたしの見たいのは、役者が白い布きれをかぶつて一つの蛇のような蛇の精を両手に捧げているのと、もう一つは黄いろい著物きものを

著^きた虎のような虎が躍り出すことである。わたしはそれをいつまでも待つていたが遂に見ることが出来なかつた。女^{おやま}形が引込むと、今度は皺だらけの若旦那が出て来た。わたしはもう退屈して桂^{けいせい}生^{せい}に吩^い附^いけ豆乳^いを買いにやつた。桂生はすぐ返つて来た。

「ありません。豆乳屋^{つんぼ}の聾^{つんぼ}は帰つてしまいました。昼間はあつたんですがね、わたしは二杯食べました。仕方がない。お湯を一杯貰つて来て上げましょうか」

わたしはお湯も飲まずになお突立つて芝居を見ていた。それも何を見たどハッキリ言うことが出来ないが、役者の顔がだんだん変^{へんてこ}槓^{てこ}のものになつて、五官の働きがあるのだから、ないのだから、何もかも一緒くたになつて区別がつかなくなつた。小さな子供は勝手に自分の話をしていた。するとたちまち一人の赤い薄ぎぬを著た道化役が舞台の柱に縛られて胡麻塩^{ごま}の者から鞭で打たれた。みんなはようやく元氣づいて笑い出した。これはその一晩の中で、一番いい幕だつた。そうこうしているうちに、ふけおやまが出た。

ふけおやまはわたしの大嫌いなもので、何よりも坐つて歌を唱うのがいやだ。この時ほかの見物人も皆いやな顔をしていたから、あの人達の考えもわたしと同じであることを知つた。そのおやまは初めしずしず歩いて唱つていたが、しまいにととう真中の椅子の上に坐つた。わたしはうんざりした。雙喜や他の人達もぶつぶつ言いだした。わたしは我慢

してしばらく見ているとその役者は手を挙げたので立つて行くのか、と思ったところが、いやはや、やつぱりもとの処で長々しく唱い続けた。船の中の者はみんな溜息を吐いたり欠伸をしたり。雙喜は終に堪えかね、「こいつはあしたまで続きそうだけ。もう帰ろうじやないか」というと、みんなはすぐに賛成して、勇ましく立上がり、三四人は船尾へ行つて棹を抜き、幾丈か後すざりして船を廻し、ふけおやまを罵りながら、松林に向つて進んだ。

月はまだ残つていた。見物した時間はあまり長くもないらしかった。趙莊を出ると月の光はいっそうあざやかに became。ふりかえつて見ると舞台は燈火の中に漂渺として、一つの仙山樓閣を形成し、来がけにここから眺めたものと同様に赤い霞が覆いかぶさり、耳のあたりに吹き寄せる横笛は極めて悠長であつた。わたしはふけおやまがもう引込んだにちがいないとは思つたが、まさかもう一度見せてくれとも言えなかつた。

まもなく松林は後ろの方になつた。船あしは決して遅くもなかつたが、あたりは黒く濃く、夜更であることが知れた。彼等は芝居を罵り笑いながら船を漕いだ。すると舳に突当る水の音が一際あざやかに、船はさながら一つの大白魚が一群の子供を背負うて浪の中に突入するように見えた。夜どおし魚を取っている爺さん連は船を停めてこちらを眺め

て思わず喝采した。

平橋までは一里もあるらしかった。漕ぎ手も皆つかれた。無暗に力を出した上になんにも食わないからだ。その時桂生はいいことに気がついた。羅漢豆らかんまめが今出盛りだぜ。火があるからちよつと失敬して煮て食おう。みんなは賛成した。すぐ船を岸へつけておかに上あがった。田の中には真黒に光ったものがあつた。それは今実を結んだ羅漢豆であつた。

「あ、あ、阿發、この辺はお前の家の地面うちだぜ。あの辺が六一爺ろくいちおやしの地処だ。俺達はそいつを取つてやろう」

真先におかへ上あがつていた雙喜は言つた。われわれは皆おかへ上あがつた。阿發は跳ね上あがつて「ちよつと待つてくれ、乃公おれに見せてくれ」

彼は行つたり来たりしてさぐつてみたが、急に身を起して

「乃公うちの家のがいいよ。大きいからね」

この声をきくと皆はすぐに阿發の家の豆畑へ入つた。めいめい一抱えずつもぎ取つて船の中へ投げ込んだ。雙喜はあんまり多く取つて阿發のお袋に叱られるといけなひと思つたので、皆を六一爺さんの畑の方へやつてまた一抱えずつぬす偷ませた。

年上の子供はまたぶらぶら船を漕ぎ出した。他の者は船室の後ろで火を起した。年弱としよわ

の者はわたしと一緒に豆を剥いた。まもなく豆は煮えた。みんなは船をやりつ放しにして真中に集まって、撮つまんで食った。食つてしまふとまた船を出した。道具を片付けて豆まめ殻がらは皆河の中へ棄てた。何の痕跡も残さなかつたが、雙喜は八おじさん（船の持主）の塩と薪を使ったことを心配した。あのおやじはこまかいからね、きつと嗅ぎつけて怒鳴つて来るにちがいない。

みんなそこでいろいろな意見を吐いたが、結局、構うもんか、もしあいつが何とか言つたら、去年あいつが陸わかへ上あがつて櫛はぜの枯木を持つて行つたからそれを返せと言つてやるんだ。そうして眼の前で、八の禿頭を囁してやるんだ。

「家うちへ帰れば大丈夫だよ。乃公が保証する」

と雙喜は船頭みよしに立つて叫んだ。わたしはみよしの方を見ると、前はもう平橋であつた。橋の根元に人が一人立つていたがそれは母親であつた。雙喜はわたしの母親に向つて何か言つたが、わたしも前いちのま船ふねの方へ出た。船は平橋に来て停つた。われわれはごたごた陸わかへ上あがつた。母親は少し不機嫌で、十二時過ぎても帰らないからどうしたのかと思つたよ、とは言つたが、それでも元氣よくみんなをよんで、炒いりごめ米こめを食わせた。みんなはもうおやつを食べているし、眠くはあるし、早く帰つて寝たかつたので、すぐに散り散りに別れた。

次の日、わたしは昼頃になってようやく起きた。八おじさんの塩薪事件は何の問題も引起さなかった。午後はやはり蝦釣りに行った。

「雙喜、てめえ達はきのう乃公の豆を偷んだろう。いけねえなあ、たくさん偷んだ上に、あんなに踏み荒しては」

わたしは首を挙げて見ると、六一爺さんは、小船に棹さして豆売からの帰りがけらしく、船の中にまだたくさんの豆が残っていた。

「ええ、わたしどもは御馳走になったよ。初めはお前のとこのものは、要らなかつたんだが、ね、御覧、お前はわたしの蝦を嚇おどかして逃してしまったよ」と雙喜は言った。

「御馳走か——ちげえねえ」六一爺さんはわたしを見ながら權をとめて笑った。

「迅ちゃん、きのうの芝居は面白かつたかね」

わたしは頷いて「ええ」と答えた。

「豆はうまかつたかね」

「ああ大変うまかつたよ」

六一爺さんは非常に感激して、親指をおこして、得意になって喋舌しゃべりった。

「さすがは大どころで育つた学者だけあつて、目が高い。乃公の豆は一粒撰よりなんだぜ。

田舎者にやわからねえ。全く乃公の豆は、ほかのものと比べ物にならねえ。乃公はきよ
う幾らか、おぼさんのところへ持つてつてやるんだ」

彼はそこで權を押し過ぎて去つた。

わたしは母親に喚よばれて晩飯を食いに帰つたら、卓上の大どんぶりに煮立ての羅漢豆が
あつた。これは六一爺さんがわたしの母とわたしに食べさせるために贈つてくれたもので、
彼は母親に向つて、わたしのことを籠べらぼう棒ぼうにほめていたそうだ。

「年はいかないが見上げたもんだ。いまにきつと状じょうげん二元あたに中るよ。おぼさん、おめえ様
の福分は乃公が保証しておく」

わたしは豆を食べたが、どうしてもゆうべの豆のような旨みは無かつた。

まったく、それからずっと今まで、わたしは本当にあの晩のようない豆は二度と食べ
たことはなかつた。——あの晩のようない芝居も二度と見たことはなかつた。

(一九二二年十月)

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「彼奴↓あいつ 或る↓ある 一層↓いつそう 況んや↓いわんや 恐らく↓おそらく
凡そ↓およそ 屹度↓きつと 位↓くらい 呉れ↓くれ 此奴↓こいつ 極々↓ごくごく
此処↓ここ 此の・此↓この 宛ら↓さながら 而も↓しかも 知れない↓しれない
随分↓ずいぶん 其処↓そこ 其↓その 沢山↓たくさん 丈け↓だけ 只↓ただ 忽ち
↓たちまち 多分↓たぶん 給え↓たまえ 為↓ため 一寸↓ちよつと 居↓てい
置↓てお て来↓てく て仕舞↓てしま て見↓てみ 迎も↓とても 兎に角↓とにかく
取りも直さず↓とりもなおさず 尚お↓なお 殆んど↓ほとんど 況して↓まして 又
・亦↓また 未だ↓まだ 丸切り↓まるきり 丸で↓まるで 見る見る↓みるみる 若し

↓もし 矢ツ張り↓やツぱり 矢張り↓やはり 漸く↓ようやく」

※底本に収録された他の作品に、「燈」と「灯」の混在がみられるので、この作品でも、「燈」はそのままにしました。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（山本貴之）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年8月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

村芝居

魯迅

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 井上紅梅訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>